

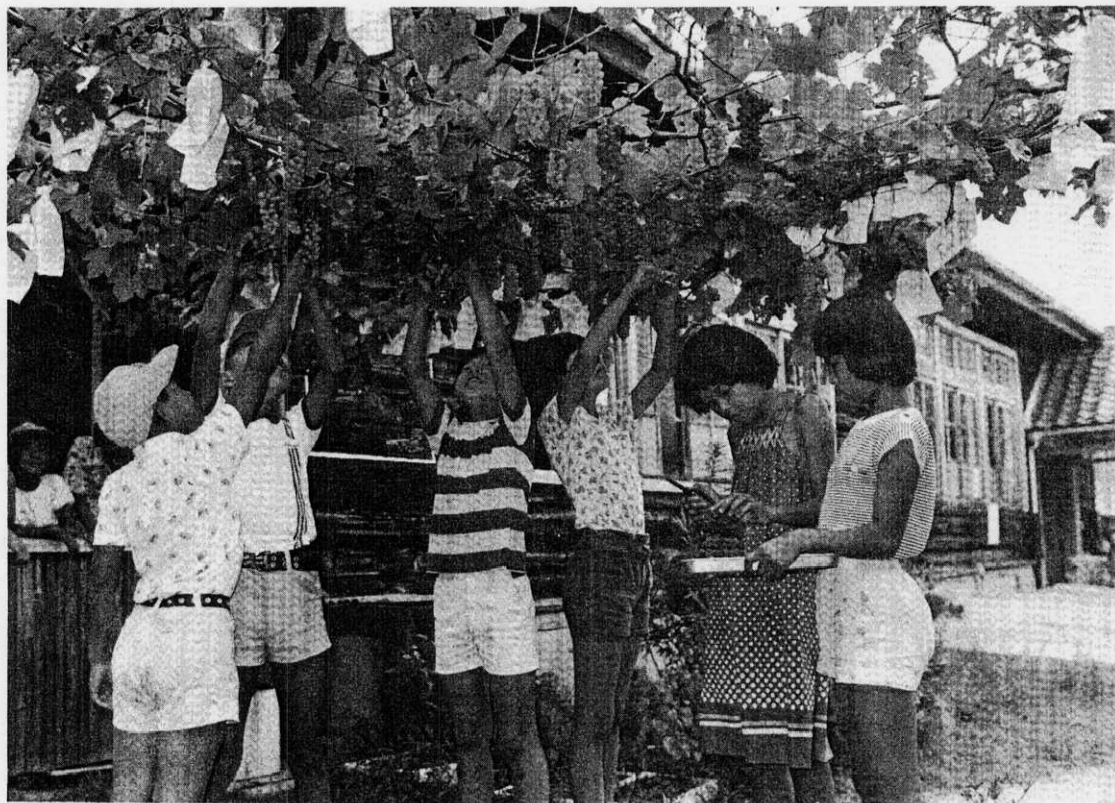


「先生、ぶどううまそうだね。
早く食べたいなあ。」

肥料をやって剪定し
消毒、袋かけと
児童会での
長い間の手入れのかいあって
ずっしりと
重そうなふさが色づいた。

学区のシンボル
駒立のぶどうは
子どもたちの手によっても
守られ
育てられる。

昭和53年9月1日 / 編集・発行 / 岡崎市教育委員会



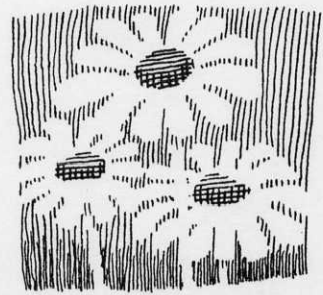
(郷土の特産駒立のぶどうをつむ子供たち—恵田小)

— 教育随想 —

自らの師たれ

— 岡崎教育に学ぶ —

仲澤健次



岡崎市の教育目標の中に「学ぶ者のみ師となる資格をもつ」ここに思いをいたし自由にして闊達な現代教育の展開と日々の教育実践の重要性を明確に打ち出されていることは同感の極みであります。

まさに自ら進みゆく者のみがいよき人を教育し得ると言わなければなりません。未だに限りなく生きつづける子ども達を育てる教師には自らを成長させる意欲が必要であることは言うまでもありません。

これからの社会は、学習社会とも言うべき進展の激しい時代であると言われます。新しい時代には新しい教師像が描かれるべきでしょうが、われわれ教育にたずさわる者としてどのように自身を啓発すべきでありましょうか。

それは教師自身のもっている条件と、これに対応する環境的な条件との中で自分自身を磨きあげ、啓発していかなければならない問題でありましょう。今日は

昨日の今日ではなく、明日は今日の延長であってはならない。そこにたゆまざる反省と前進が必要であろうと思います。

学校は具体的でもっとも力強い機能をもつ実践単位であります。そこには教授学習過程と管理経営過程の側面があると書かれています。しかし、私はいまひとつ研修研究過程ともいふべき機能がもう一面にあることを見逃してはいけません。思ふのです。学校の実践過程とはこの三つの機能が総合的にはたらいに創造的活動をなし得るのではないかと考えます。

たしかに学校を超えた研究や研修もありますし、また行政的に措置され計画された研究、研修活動もさかんにおこなわれています。最近では地域の大学開放もされ、社会教育における施設の充実や活動内容の向上もあって教師の自己啓発の場は多様化、広域化されてきていることは事実です。この傾向は生涯教育の考え方

からも一層助長されるでありましょう。それにかかわらず教師の研修や実践研究のもっとも基本的な場は学校であることは変わりありません。

教師における自己啓発は、長く困難な道であるかも知れません。さまざまの条件によって時には壁につきあたり、ときには失望におちいることもありましょう。

しかもなおこれを永続してゆくがための条件としては学校を基本の場とするという考え方と、子どもたちのための実践という考え方が確立していなければならぬと思います。

貴教育委員会においては、校内の現職教育について日課表の中に週二回が位置づけられ、研究授業、ノートを見る会、粘土の扱いなどの実技等、具体的に実施されている。全く敬服している次第です。

市内を流れる菅生川の川面に優雅な姿を見せる錦鯉、夏の宵をかざるゲンジボタルの乱舞、早朝の街を清掃する人々の姿、三河、尾張の伝統的文化に支えられ、それらの環境の中に今日もまた大胆に、しかもするどく教育の真髄をつくメスがふるわれようとしている生きた岡崎の教育を感じる時に感懐の念を禁じ得ません。

岡崎教育のますますのご発展を祈念し
拙筆いたします。

(千葉県柏市教育長)

・ 柏市は岡崎市と長期研修員の交換都市です。



来年こそは

鈴木 欽也

「こらっ、腰が高い！」

「ボールをよくみるんだ！」

練習となると、つい我を忘れてしまい、恒例の美声(?)が運動場いっばいに飛び交い、近くの民家にもまで響きわたる。さぞ、うるさがられていることだろう。

ここ二年、わがチームは二回戦の壁がどうしても破れない。今年こそは。と練習量も増し、雨でも土間で素振り・柔軟運動・軽い投球練習とトレーニングに励み、ボールを体から離させないように心掛けてきた。

練習試合のたびに勝ち星を重ね、子どもとともに喜びに浸っていた。「今年はいけるぞ！」と、私の目は日増しに輝き始めた。

しかし、結果は例年どおり二試合目で敗退。だが、子どもたちはすべての力を出し尽し、立派な戦いぶりであった。帰りの車中で子どもたちが、

「練習のときの先生の目は、今にも張り裂けそうな大きな目で僕たちを見詰めて

鳴く虫三題



アオマツムシ

ふるさとの自然

ツクツクボウシが里の周辺でも盛んに鳴き出すようになる、あたりもようやく秋の気配がしてくる。夜露にぬれた庭に出てみると、鳴く虫たちの愛のささやきが始まっている。マツムシ・スズムシ・カネタキ・クサヒバリなど、秋を代表する虫たちの声も、気温の低下と周辺の湿度の関係で、夏の頃とは異つたよく澄んだ音色になる。虫の声はこの頃が最も美しい。

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに

ころもかたしきひとりかもねん

日本人にとって、鳴く虫はなつかしい風物のひとつである。秋鳴く虫の多くはカマキリ・ゴキブリなどの類と同じ直翅目の仲間、草原に依存して生活してい

るものと、森林性のものとがある。矢作川や大平川の河原や周辺の丘陵地によくみられるが、コオロギの類などは台所の片隅など、思わぬ所で声を聞くことがある。

秋の鳴く虫の王様はクツワムシである。矢作川の堤のクズなどおしいげつた草むらでガチャガチャ……と騒がしく鳴く。頭からはねの先まで五〇〜六〇ミリもあり、発音器の部分も鳴く虫の中では並はずれて大きい。鳴き声が大いなのは当然であろう。しかし、体格や鳴き声とは対照的に、性質は極めておとなしい。根っからの肉食主義者で種々の植物の葉を食べる。キリギリスのように他の昆虫を襲って食べたりはしない。生存競争の激しい昆虫の世界では、平和主義者の部類にはいる。

クツワムシの仲間にはタイワンクツワムシがいる。帰化昆虫である。天白町や中之郷町あたりの矢作川堤に多くみられた。クツワムシに極めて似ているが、からだやはねが細長いので区別できる。鳴き声もクツワムシより静かで、初めギーギーと十回くらい続けたのち、ジャーと続けて鳴く。最近、堤防の整地のためクズが少なくなり、この虫の声もあまり聞けなくなつてしまつた。

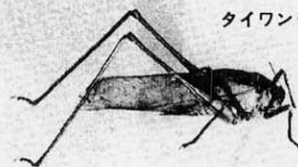
帰化昆虫といえ、この数年前から市街地の街路樹や周辺の山林で、リリー、リリー、リリーと、小鳥の鳴き声のようなよくとおるかん高い声で鳴く虫がいる。アオマツムシというコオロギの仲間、明

治の頃中国あたりからはいつてきて日本に帰化したものである。黒かつ色系の多いコオロギの仲間の中で、この虫だけは木の葉のような美しい緑色である。

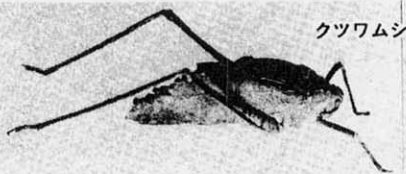
アオマツムシは完全な樹上生活者である。木の葉を食べ、生きた木の枝の皮下部に産卵する。木をゆすると薄緑色のほねを広げてヒラヒラ飛びたつ。また、一匹が鳴き出すと周りのものが調子を合わせるように鳴き出し、いつせいに鳴きやむ習性がある。ネオン輝く連尺通り、伝馬通りなどでもこの虫の声はよく聞かれる。緑化都市岡崎にふさわしい虫である。樹上から降るように鳴く声はすばらしい。こんな虫を私たちの身近に、いつまでも残しておきたいものである。

(梅園小 竹内 孝之)

タイワンクツワムシ



クツワムシ



ていたのに、今の目は、奥にへっこんでしまっているみたい。」と、言った言葉が妙に印象的だ。

よおーし、来年こそはめを出さずぞ！

(本宿小)

「歩道」と「車道」

橘 依子

「人が歩く道を何と言いますか。」学習済みのため「歩道です。」と、すぐ答えが返ってきた。「歩く道で、歩道といいますがね。」そこで思いついたのが車道である。「それじゃ、車が通る道を何と言いますか。」歩道から車道と、すぐに答えられるだろうと思っていたら、答えは次の通りであった。

まず「東名高速道路。」思わず「うーん。高速道路ね、車が通るねえ。」と、言っていると、次の答えは、「国道一号线。」続いて「ミヤコショップの前の道・土地の通り。」と出てきた。その間「人が歩く道は、歩くという字と道という字で歩道。だつたら車を通る道は、何だん。」と、声を荒げて繰り返した。歩と道、車と道を色チヨークで囲んで気付けようとしたが、そう簡単にはいかない。

しかし冷静になって考えてみれば、いくら相手が二年生だとはいえ、すぐに答えられるだろうと高をくくつたワタクシの何と愚かなことか。まずかつたなあ。

(福岡小)

岡崎再見

⑨ 乙川を下る

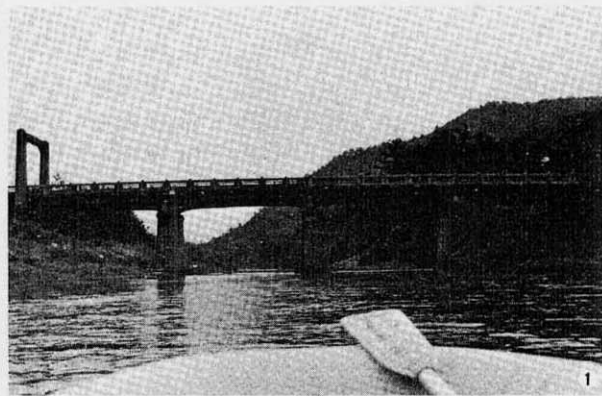
その二



5



2



1

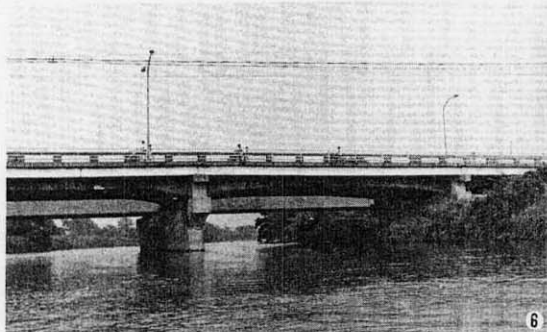


3

先月号は、カヌーで乙川、男川の合流点までの風景を紹介したが、今回は、乙川をゴムボートで下った様子を紹介する。美保橋をスタート。竜宮で小さい昼食。深い淵、せまってくる岩、必死でなれないオールをこぐ。やがて静かな水面に。兩岸には、熱帯植物を思わせるようなツタが茂り、鳥が急に飛び立つ。美川中を右に見て、国道の下をくぐる。

デイスカパー乙川。つかれたが楽しい一日であった。

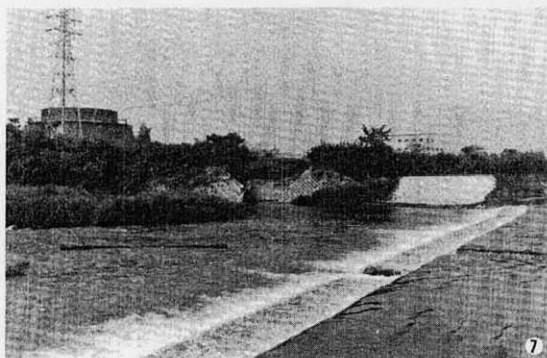




6



4



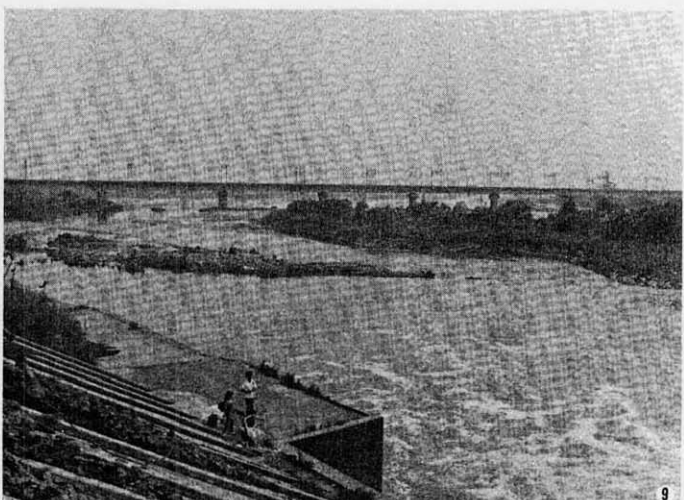
7



8

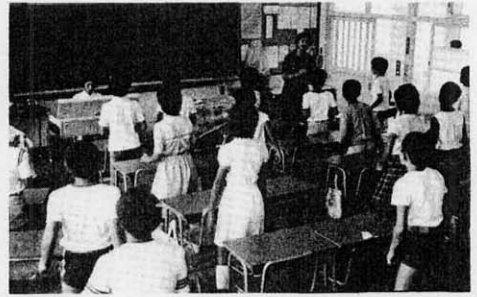


10



9

- ① 小美町と保母町を結ぶ小美橋。今はコンクリート橋だが、かつてはつり橋であっただろう。
- ② このあたり、つり人の姿が多い。本宿、新箱根に源を発する鉢地川は、ここで乙川に合流する。
- ③ 竜宮の淵にさしかかる。急な崖にクチナシの可れんな花が咲いていた。
- ④ 竜宮の深淵。右岸に雌能頭、左岸に雄能頭竜神をまつるほこらが立つ。下流のせきのために往時の急流の面影はないが……。
- ⑤ このあたり、両岸にツタカズラのからまった古木がおおいからぶさり、アマゾンの景観さながらの所もある。
- ⑥ 国道一号線をくぐる。天然プールで知られた所。馬が三頭、水浴していたのが印象的であった。
- ⑦ 男川浄水場、岡崎市民の命の源、かつての集中豪雨を思い出した。
- ⑧ 満性寺河原から吹矢橋公園をみる。浄瑠璃姫が入水した淵があったという。
- ⑨ 建設省水質調査地点、合流点まで〇、〇軒?……ここから乙川の水は六ツ美方面へ流される。
- ⑩ 矢作川との合流地点。長い長いゴムボートの旅も、ここで終点となった。



教育日々



五年生の時(この子は音痴なんだろうか)と思われたA君やB君が、六年生の学期末テストで、驚くほど正確な音程とすばらしい声を聞かせてくれました。「いつでも、どこでも、だれもが歌声を」をモットーに、本校では一学期の初めから、朝の歌、掃りの歌を歌うようになりました。

それも、ただ歌うだけではなく、体全体でリズムをとり、自主的に楽しんで歌うことを考えてやっています。その結果がA君やB君に顕著に表れてきているのだと思うと、毎日歌うこと

この夏、岡崎で日本ペンマンシップ協会主催の英習字展示会が開かれた。教科書の筆記体の手本を書かれたT先生にお目にかかれた。アルファベットを走り書きし、ご指導を仰いだ。

ひとつひとつ説明しながら直して下さったが、その筆跡にただ感嘆するばかりであった。中学校以来、久しぶりに三重丸を二つ三つもらって悦に入ったが、我が文字をみるにつけて、中学一年時の正しい筆記体指導の必要性を痛感した。

あるとき、私の文字をみて悪友が「見ちゃいられない。何と

の効果の大きさに驚かされます。

しかし、いつの間にも大きな顔をして教えるようになったのだらうと複雑な気持ちになります。

あれは、私が新卒で三年生を受け持った時のことでした。

音楽(音が苦)と私

岡崎小 渡辺君子

学生時代は、小学校でそれとも音楽を教えることなど、夢にも思っていなかったのですから、音楽の時間になるとゆううつな気分になり、それでも、何とかオルガンをひき歌わせていまし

いうそそっかしい字だ。」と、言った。「早いのが取柄、間違えてないのが取柄。」と聞き直つても、やはり、一味の淋しさを感じ、よい文字を書こうと思つた。

正しい文字と正しい音と

常磐中 関原克之

美しい文字を、はみんなの願いだである。

同じことが、音読についても言えると思う。

「高校の授業は文法ばかりで面

た。

「先生、今日はオルガンひくの三回まちがえたよ。」

「今日は、一回しかまちがえなかったよ。」

と、子どもの目はきびしい。

そのたびに、私は、

「今日はちょっと頭が痛くてね」と、苦しい言い逃れをしていました。

こんな私でも、オルガンの上手な子を教師がわりに伴奏させるということに抵抗を感じ(教師としてのプライドに傷がつくとも思ったのでしようか…)ひそかに練習をし、

白くないよ。本なんかあまり読まない。」と。

ノートには単語がぎっしりと書かれ、教科書には行間に訳がびっしり書いてある。

「自分でやったの?」

「先生の訳を聞いて写したの。」

彼等にとって、英語を学ぶ楽しさは、もはや音読にはないらしい。中学生の時には、あれほど大声で、楽しそうに読んでいたのに……。

美しい文字が書け、正しい発音が出来るといふ素朴な喜びを味わわせてやれるように努力していきたい。

「どうだ。先生もこんなに上手にひけるんだから。」と、今から思えばおかしくなるような強がりやっていました。あれからのくらしい月日がたったのでしよう。

他校で音楽の授業を見せていただいたりなどの研修を積んだせいでしょうか、

「さあ、先生が見本に歌うからよく聞いていなさいよ。」

と、半ば興味深げに、半ばあきれて見ている子供たちを前にしている自分に(あら、いつから音が苦が音楽になったのかしら)と、驚くこの頃です。

Ratsuyuki Shikihara

T先生の書かれた手本



岡崎健児全国競技大会 水泳・陸上四種目に、25名が参加

第31回西三河中学校選手権大会岡崎・額田支所予選の各競技種目で優勝した岡崎健児（個人・団体）25名は、未曾有の酷暑の中を、郷土の声援を背に、続々東京や大阪で開催される全国大会々場へと歩を進めている。

本年度の全国大会出場種目・会場と栄えある出場校・参加者は次のとおりである。

▼バレーボール（男子）・東京都体育館・8/16
▼矢中Ⅱ脇田秀樹・深津重之・落合啓全・大塚学・児玉伸一・杉本恒之・生駒博司・林常広・鈴木直博・小田島和之・竹内登・萩原勉

▼軟式庭球（男子）・大阪市長居公園庭球場・8/15
▼矢中Ⅱ鈴木照彦・鈴木茂・大塚保広・柴田浩光

【寄贈刊物・資料等】
移行措置研究資料
市教科指導員の会編
岡崎市教育委員会編
市内の指定文化財二〇九点を紹介。B5判・12頁
◆この一冊第15集

梅小現職教育委員会編
歴史と伝統を有する梅園小教員の読書研修記録。B6判・62頁
◆岡崎のハーモニー
市現職教育・音楽部編
五年間にわたる岡崎のハーモニーを写真紹介。A5判・18頁

▼水泳競技（男女）・大阪市宮プール・8/10
▼矢中Ⅱ安田直美（一〇〇米平・二〇〇米平）、石津隆志（一〇〇米平・二〇〇米平）、武田高泰（一〇〇M平）▼甲山中Ⅱ象雅子（四〇〇Mメドレー）、角谷守彦（一〇〇M・二〇〇Mバタフライ）▼葵中Ⅱ中村達博（一〇〇M背・一〇〇M自）▼城北中Ⅱ横山晴男（一〇〇M自）▼東海中Ⅱ今泉陽子（八〇〇M自）

▼陸上競技（女子）、東京国立競技場・8/26
▼六ッ美中Ⅱ犬塚幸子（八〇〇米ハードル）

津隆志君が男子一〇〇M平と二〇〇M平において、1分11秒38、2分35秒81の好タイムで優勝したほか、東海ブロック中学生バレーボール選手権大会（男子の部）において、矢作中チームが準決勝・決勝戦で、三重県嬉野中・静岡県浜岡中をそれぞれ破って優勝を決めている。

■二十五周年記念理科作品展
▼期日 10月13日（金）17日（火）
▼会場 城北会館
▼テーマ 「自然にひたる」
▼展示内容 ①小中学生の研究作品（各小学校六・各中学校四・五級以内、うち創意工夫をこらした製作物一点以上を含む）②父母・教師の研究製作物③遊びと研究のための材料と道具④戦後理科教育の変遷（理科教科書・文集「理科の研究」・実験機械器具・理科教育変遷年表）
▼刊行物 二十五周年記念文集「岡崎の理科」B6判五〇頁

第31回岡崎市中学校市長杯総合体育大会 兼 西三河中学校選手権大会岡崎・額田支所予選成績

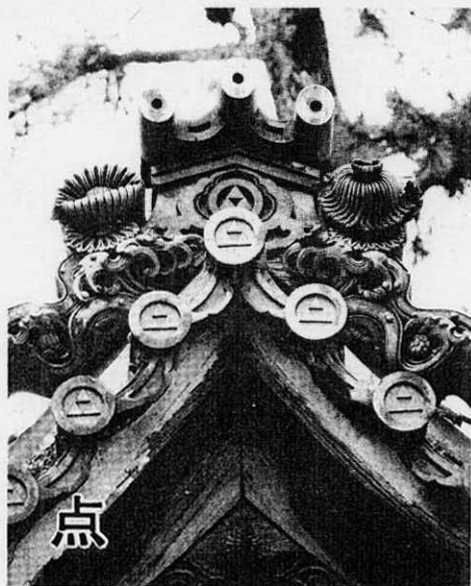
種目	性別	優勝	2位	3位	位
バレーボール	男	矢作	葵	城北	
	女	幸田	福岡	矢作	
バスケットボール	男	葵	美川	海・矢作	
	女	幸田	附属	六ッ美・葵	
軟式庭球	男	附属	南	甲山	
	女	矢作	甲山	額田	
卓球	男	幸田	南	河合・東海	
	女	幸田	東海	葵・額田	
体操競技	男	竜海	葵	甲山	
	女	南	葵	竜海	
ハンドボール	男	城北	美川	葵・六ッ美	
	女	六ッ美	美川	葵・岩津	
剣道	男	城北	南	附属・幸田	
	女	幸田	美川	附属・福岡	
水泳競技	男	矢作	甲山	城北	
	女	甲山	矢作	葵	
陸上競技	男	矢作	葵	岩津	
	女	東海	六ッ美	矢作	
柔道	男	美川	竜海		
	女	岩津	矢作	葵	
軟式野球	男	岩津	矢作	葵	
	女	甲山	城北	幸田	

〈総合成績〉 53・7・21～8・4

	優勝	2位	3位	4位	5位	6位
男子総合	葵	矢作	南	城北	東海	岩津
女子総合	矢作	葵	甲山	東海	六ッ美	城北
男女総合	葵	矢作	東海	城北	甲山	南

第5回 岡崎市小学校球技大会
第17回 岡崎市小学校ソフトボール大会
第16回 岡崎市小学校水泳競技大会
〈成績〉 53・7・21～8・5

種目	性別	優勝	2位	3位	位
バスケットボール	男	愛宕	根石	岩津・岡崎	
	女	藤川	愛宕	六名・矢作東	
バレーボール	男	山	大樹寺	三島・六名	
	女	六ッ美中部	六名	矢作南・山中	
ソフトボール	男	六名	広幡	矢作東・附属	
	女	岩津	男川	附属・緑丘	
サッカー	男	福岡	岡崎	六ッ美中部・竜美丘	
	女	井田	根石	矢作南	
水泳競技	男	井田	根石		
	女	根石	井田	矢作南	



所在地一岡崎市中町北野・岡崎天満宮

経の巻菊水足付瓦

中町北野の岡崎天満宮本殿東に御嶽社がある。碑によると明治三十四年十一月八日に、両町

にあった社を当地に移したもので、社殿の規模は正面一間、側面二間の入母屋軒一重造の小さな社である。

この社に重みを与えているのが、「経の巻雌雄菊水足付」の鬼瓦である。

「菊水」の瓦は三河でも大変珍しく、技術的にもかなり高度

なものであるといわれ、棟札には瓦匠杉浦亀治郎、宮大工杉浦広五郎とある。

祭神は五帝竜神、岡象女神(みずはのめのかみ)という水神である。水神は山の神と同じように子授けや安産を祈る習俗があったため、天満宮に遷宮したおりに子孫繁栄になぞらえて、雌雄陰陽の菊水瓦を奉納して据えたものと思われる。

雄陰陽の菊水瓦を奉納して据えたものと思われる。

●カット

細川小

山田哲也

この本を

- 海猫の襲う日 夏堀 正元 ¥ 980 講談社
- 英雄たちへの挽歌 上前淳一郎 ¥ 850 文芸春秋社
- 南蛮人のみた日本 佐久間 正 ¥ 700 主婦の友社
- ぼくの浅草案内 小沢 昭一 ¥ 850 講談社
- マンボウ夢遊郷(中南米を行く) 北 杜夫 ¥ 780 文芸春秋
- 日本語の文法を考える 大野 晋 ¥ 280 岩波書店
- 経済学入門 都留 重人 ¥ 360 講談社
- 言葉あるいは日本語 丸谷 才一 ¥ 980 構想社
- 片しぐれの記 水上 勉 ¥ 980 講談社
- 文明の生態史観 梅棹 忠夫 ¥ 980 中央公論社

お彼岸のお中日は、「秋分の日」。祖先をうやまい、亡くなった人々をしのぶというのがこの日。

昼と夜の長さが同じ日という宇宙の運行の不思議さを考えつつも、ふだん御無沙汰している墓参りに出ようと思う。きっと、秋風のかすかな息づかいが聴こえるはずだ。

シャボン玉遊びもなつかしい。なげなしの石けんを小刀で削り、ほどよく水でかき混ぜ、麦わらでシャボン玉をつくる。

いろいろな色をつくりながら飛んでいくシャボン玉をみては、興奮もしたものだ。人と大きさを競うのも愉快だった。こんな風景も今はなかなか見られない。

シオシア

暑い暑い夏だった。連日の水泳指導でこんがり焼けたT子先生。「わたしのラバさん、會長の娘……」これで腕輪をはめて長い腰みものをつけてもらえば、まさに「南洋じゃ美人」ということになる。あくせく通う自動車学校で「あんた何の商売してるの。」と聞かれてしおれている彼女は若い。

すたれ、消えてゆく子どもの頃の遊び。時の移り変りはいかんともしがたい。と傍観するわけにはゆかず、ある日近所の子どもを集めて、「かいどり」の楽しみを教えてやろうとバケツを持って小川へ直行。どじょう、ふな、もろこ。泥にまみれた顔、顔。「おじさん、あしたは何を教えてくれる?」